



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第17回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

和解の政治学

政 おいおい、また八月だからって、「和解」を論ずるのはいいけど、何で「政治学」なんだよ。

信 うん、今日はふだん『信徒の友』を読まないような人と話してみたいと思ってね。それで君にご登場ねがったわけなんだ。

政 なんだ、おれは仮想読者か。

信 まあそういうことだ。だからおとなしく僕の議論に付き合ってくれ。

政 そういうわけにはいかんよ。まず君の

その題が悪い。君はクリスチャンの精神に基づいて「和解」の大切さを説くつもりだろうが、政治学っていうのは何と言っても現実の力関係の話だぜ。ごたいそうな精神論をぶつてもらったって、何の足しにもならんよ。

信 いや、まさにそこがポイントなんだ。

日本は韓国や中国といまだに和解ができていない。それが日本の政治や経済にどれだけ悪い影響を及ぼしているかを考えれば、精神論も大事だってわかるはずだ。

政 あのな、おれだって小泉さんの靖国参拝には賛成してないよ。でも、君には現実の政治のからくりがまったくわかってないみたいだね。日中韓の関係が悪くていちばん喜んでいるのはアメリカなんだぜ。

信 そんな穿った議論は君たちに任せよう。でも、僕が話したいのは、靖国問題よりも前に、そもそも日本は「和解」ができていない

ってことだ。

政 そりやどういうことだい。平和条約だってあるし、過去の戦争について、日本は何度も謝ったじゃないか。

信 「謝る」ってことは、相手の許しを求めることだ。たしかに、日本は過去に起きた不幸な出来事に遺憾の意を表明したかもしれない。それが二度と繰り返されてはならない、という決意も表明したかもしれない。でも、相手の「許し」を求めてはいないんだよ。自分の側で完結していて、相手の返事なんか聞いていない。

政 そりや言いすぎさ。日本は言葉だけじゃない、莫大な円借款とかも出してるんだぜ。

信 でもね、いくら言葉や札束を積み上げても、彼らの根本感情は変わっていないんだ。なぜだろう。「和解」っていうのは、一方的な宣言じゃなくて、相手に許しを求めて、それを相手からもらう、というやりとりがあっ

でもね、いくら言葉や札束を積み上げても、

彼らの根本感情は変わっていないんだ。なぜだろう。

「和解」っていうのは、一方的な宣言じゃなくて、

相手に許しを求めて、それを相手からもらう、

というやりとりがあつてはじめて成立するわけだ。

僕はね、そのやりとりがまだできていないと思う。

ではじめて成立するわけだ。僕はね、そのやりとりがまだできていないと思う。

政 「許しを求める」なんて、国家理性としてではできない相談だよ。もらえるかわからないものを求めるのは、自国の立場を相手の意向に委ねきりにしてしまうことだからね。

信 うん、だから難しいわけだ。でもそこを通らないと、いつまでもほんとの「和解」はできないだろうね。

政 まあ、「和解」に双方向のはたらきが必要だ、ということにはわかったよ。だけど、「許し」なんて、やっぱりキリスト教国の話なんじゃないか。日本にそれを求めるのは、宗旨違いだという気がするな。

信 僕はそうは思わない。ロシアのエリツイン大統領だって、辞任の時テレビで国民に向かつて自分の過ちを許してほしい、と語り

かけている。関係修復のやりとりというのは、どの国の文化にもきつとあるはずだよ。

政 たしかにあの人なら、許してもらおうこともいろいろありそうだな。ただ、もし君が言うように、ほんとにそうやって和解と政治が結びつくとしたら、今度は逆の問題も出てくるね。だってさ、そういう結果を狙っての謝罪なんて、実に不純じゃないか。見え透いた実利が目的で、そんなのを君は「和解」と言うのかい。

信 おや、今度は君が精神論か。僕はね、あんまり純粹さばかりを追求するのもよくないと思う。いろんな人間の集まる社会なんだから、現実的な妥協や打算がはたらくのは当然だよ。「許し」もその一部だ。

政 でも君だって、許しを求めさえすれば誰でも許される、と言うつもりはないだろう。

「ごめん」で済めば警察は要らんわけだ。つまりさ、「許し」だの「和解」だのって、結局は悪人の道徳的な責任をうやむやにしまうことなんじゃないか。モラル・ハザードだよ。

信 いや、そうはならないさ。さつき君が言ったとおり、許しを求めるということは、自分の主体性を一時的に放棄する覚悟が必要だからね。

政 でも、おれならそう簡単に悪い奴を許さないぜ。だって、たとえばホロコーストみたいなとんでもない悪をさ、いつたいどうやって許せるんだい。

信 すると君は、「許されざる者」は未来永劫に許されないままにしておくべきだ、という考えなのかい。

政 少なくともあの連中に関してはそうだね。ただ、それを考えると、どうも君の話は個人と国家とがごっちゃになっていっているような気がするよ。戦争の犠牲者というのはさ、本人たちはとくに死んでるんだぜ。いったい誰が誰に向かつてその「ごめんささい」を言えばいいんだい。それに、誰が犠牲者に代わって「はい許します」って言えるんだい。そこんところを神学者の君にもつとよく考えてほしいよ。

信 うーん、君は仮想読者のくせに手強いね。暑い夏がよけいに暑くなっちゃった。Ω